

高木保興編

『国際協力学』

東京大学出版会 2004年 viii + 248ページ

くろ いわ いく お
黒岩郁雄

本書の目的は国際協力学という新しい学問分野の確立である。しかも、東京大学大学院新領域創成科学研究科の教官が中心となって、共通のテキストブックをつくり、単なる「サラダボウル」ではなく、一度溶け合って別物を生み出す「融合」をめざしている。そのため、同一の章を複数の執筆者が受け持ち、共通の課題に取り組むなど、ユニークかつ野心的な試みが行われている。

さて、国際協力学の主題である国際協力とはなんであろうか。本書によると、「国籍の異なる複数のアクターが、それぞれの最終的な目的は異なっても、あることを達成するのに一緒に努力すること」と定義されている。そして、国際協力は以下の4つの段階に分けられる。順に(1)問題解決のための国際公共財の設立(援助であれば、世銀、UNDPなどの設立)、(2)参加国が合意する大枠の作成(貧困削減、環境、開発など援助理念の創出)、(3)問題解決に有効な詳細原案の作成(具体的なプロジェクト案の作成)、(4)原案に沿った具体的行動(プロジェクトの実施)などである。これらのうち、本書では(1)、(2)の段階に焦点をあてている。

各章を要約すると、第1章では、本書における主要なテーマ、枠組み、構成などを紹介している。続く第2章では、ゲーム論、情報の経済学、最適計画の理論などに依拠しながら、国際協力学の理論的枠組みについて説明する。プレイヤー間の利害対立や協力を扱うゲーム論は、軍備競争、環境問題、国際公共財など国際協力学の課題を扱ううえで有効である。しかし、情報の非対称性についての解説が不十分であることと、理論の適用事例の紹介が少ないのが惜まれる。一方、最適計画の理論はユニークな

使われ方をしている。計画の時間的不整合性の視点から、日本のODAは被援助国の援助条件の遵守(コンプライアンス)を重視してこなかったために援助に対する信任を失い、援助の効果を減じたという指摘は興味深い。第3章では、地球環境問題、自由貿易体制や国際金融制度の維持・発展、貧困や人間の安全保障などについて言及している。同時に貧困を中心とする援助政策の変遷がわかりやすく説明されており、国際協力の新しい潮流について知ることができよう。第4章では、EU、NAFTAの事例から始まり東アジア地域共同体について展望している。また、国境を越えた問題として、廃棄物の越境移動、国際河川の管理、酸性雨問題など当該国の利害が鋭く対立する問題があげられている。一方、ODAに関しては、経済発展の隘路を取り除くのがODAの役割であるという視点から、ロストウの「離陸」の理論や援助プロジェクトの作成について解説している。第5章では、国際協力の多様なアクターに焦点をあてている。国際協力の中心的なアクターは国家であるが、政府の機能の限界が明らかになるなかで、NGOや民間企業の果たす役割に対して期待が高まっている。ここでは、市民社会の代理人としてNGOの提供するサービスや政府を監視する機能、さらにはプロジェクト・ファイナンス方式による民間企業のインフラ建設事業などについて説明している。最後に第6章では、国際協力の新しい課題として、環境援助や民主化、地方分権化、援助プロジェクトなどが抱える矛盾や問題点を取り上げている。

このように本書では多くのテーマが俎上に載せられ、網羅的に解説されている。読者は、本書を一読することによって国際協力学の全体像を知ることができよう。しかしながら、本書の野心的な試みのひとつは国際協力学の確立である。そのためには、第2章で取り上げられた理論的枠組みをさらに精緻化するとともに、各章におけるテーマを共通のロジックで分析し、整理する必要がある。それが容易でないことは言うまでもないが、執筆者同士のさらなる「融合」に期待したい。

(アジア経済研究所開発研究センター)